



昭和 51年 (1976年)
8月号 (No. 374)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

ナンダ・デヴィ縦走報告 (鹿野勝彦) ……(1)	ジャヌー登攀報告 (小西政継, 住吉仙也) ……(2)
名誉会員日高信六郎氏を悼む ……(3)	日高さんのこと(沼倉寛二郎)
日高さんを囲んで]	本邦初のガイド組合 ——歴史は大切にということ—— (渡辺公平) ……(4)
図書紹介 ……(5)	THE HILL MAGARS AND THEIR NEIGHBOURS 続ブータン感傷旅行 東ネパール登山と調査報告書 NOTHING VENTURE, NOTHING WIN 辻村さんの書簡 ……(5)
アラスカの山からゴミの回収を要求 ……………(7)	63年ぶりの上高地の夜 ——第30回ウエストン祭に参加して一 (大木操) ……(8)
東海支部1976年度総会報告 ……(9)	第14回木暮翁碑前懇親会報告 ……(11)
三水会 6月集会 ……(11)	カット/谷アユ子

成否を分けたジャンダルム

ナンダ・デヴィ縦走報告

鹿野勝彦

六月十七日、ベースキャンプにて。こぶさたいたしました。ようやく成功の知らせをお届けできることを、隊員一同心からうれしく思います。

隊荷の輸送に大苦戦したため、最後の隊員がベースキャンプ入りしたのは、六月になってからという具合になりましたが、天候が安定していたことと、隊員の健闘によって、六月三日、長谷川、高見、ザンブウエの三名が東峰頂上(東第四キャンプ予定地)に到達。九日、重広、P・チャンド、桐生、ラトワン・シン等四名が東第四キャンプを建設しました。一方、西

側は六月八、九日、加藤、寺本、ピンジュ、小林、チャンドオラ等による頑張りで、西第四キャンプ(約七二五〇メートル)が建設されました。西側は登攀開始が遅かったため、東側のベースに比べて若干遅れぎみで、ここ数日は無理な行動を強いられました。ともかく、これでもようやく縦走の態勢が整った訳であります。長谷川、高見の第一次縦走隊は九日、ベースキャンプを出発。十二日、東峰第四キャンプ入りをしました。この際、サポートをしたD・チャンドも頂上に達したので、二回目の長谷川、高見、ザンブウエを含めて延べ十一名が東峰に登頂したこと

になります。縦走隊を迎える西側は、十二日、加藤、寺本、ピンジュ、小林等により、西第五キャンプ(縦走ルート上の主峰基部雪田)へのルート作を開始。実は、この雪のバンドをトラバースするルートについては、かなり甘い見通しを持っていた訳です。実際に取り付けてみると、予想したよりはるかに困難で、午後から天候も悪くなり、十二日中には仕事が終わらず、縦走ルート上へ到達する見込みがつかないままで一日が終わりました。しかし、すでに六月も半ば、数日前からモンスーンの影響もあらわれてきていることと、七四〇〇メートルを越える高所に何日間も縦走隊を待機させることは得策ではないこと、物資(特に酸素)の補給も待機が長びけば、必ずしも万全とはいかないことなどから、十三日が好天ならば、第一次縦走を執行する方針をたてました。

十三日朝、一応天気は良好でした。高見が苦労して持ち上げた小瓶の日本酒をテントのまわりにまいて、今日一日の天候と安全をナンダの女神に祈願した後、長谷川、高見は五時十分、東峰キャンプを出発。例のジャンダルムまでは、すばらしいペースで稜線を突破していききました。その様子が私のいる西第三キャンプやその他のキャンプからも望みできたので、一同胸をおどらせていました。ところが、十時頃、ジャンダルムに取り掛ってからは、連絡もとだえ加えて雲の中につつまれてしまいました。一方、西側からサポートの加藤パーティは、主峰とジャンダルムの間の雪田へ強引にトラバースを試み、午後三時少し前、ようやく西第五キャンプの建設に成

功しました。ほぼ同時に、ジャンダルムを越して雪田に到達した長谷川パーティを確認しました。結局、長谷川等はジャンダルムを越えるのに約五時間を費やした訳で、予想通りこのジャンダルムが縦走の成否を分ける、最も困難な部分であったようです。縦走隊二名と、サポート隊のうら疲労の激しい小林、ピンジュがこのキャンプに泊まり、加藤、寺本は西第五キャンプに戻りました。

十四日、一日中悪天候のため、両キャンプともに停滞。第五キャンプでは、昼過ぎ頃、寝ているといきなりテントが半分ほど雪崩で潰され、これを掘り起こすのに一時間近くも吹雪の中で頑張りました。十五日朝快晴、縦走隊はリッジ伝いに主峰東面を登り、加藤、寺本は南面通常ルートを登り、それぞれが頂上に向かって出発。縦走隊は特に技術的な困難はなかったようです。午前十時すぎから風雪となり、その中を登り続け、南面からのサポート隊加藤、寺本は午後三時前に、少しの時をおいて縦走隊は、東面からそれぞれ頂上に達しました。両隊があまり待つことなく頂上で合流できたことは、まことに幸運であり、一方が長時間待つようなことになったな

山をきれていこ 山には持ち帰る

らば、天候が悪化してきていた時だけに面倒なことになったかも知れません。主峰には四名が登頂したことになります。両隊は午後六時過ぎ西第四キャンプに帰着。翌十六日、両方の第三キャンプを撤収。十七日、全員ベースキャンプに集結いたしました。

第二次隊(重広、P・チャンド)、主峰からの逆縦走隊(加藤、寺本)も余裕があればと考えていましたが、天候、隊員の体力、その他すべての条件から断念しました。

なんと申ししても、あわただしく、特に最後の数日は息のつまるような山登りでした。ベースキャンプには、日本側隊員は関ドクター一人だけが残し、あとは全員が各キャンプに出払っていました。あとからベースキャンプ入りの隊員の中には、日数が少なかつただけに、順化が追いつかなかつたものも多く、苦勞しました。成功したことは、多分に幸運によるものと考えております。ともか

く縦走に成功して、全員が無事にベースキャンプに集合できたことを喜んでおります。

インド側隊員に関しまして、この成功は合同隊によってもたらされたものであって、たまたま、縦走ならびに主峰の登頂が日本人であつたにすぎない、納得してもらつております。(中略)

トラブル続きだっただけに、これで登山は終わり、もう荷上げやルート工作の心配はしなくていいんだ、ということがまだピンとこないようなあります。合同隊というところもあります。合同隊といふこともありますが、頑張りたと思つております。(中略)

今後の日程は、ポーターの集まり具合によりますが、六月二十三日頃ベースキャンプを出発し、二十八日頃ジョシマート着、七月一日、ニュー・デリー帰着の予定です。残務整理の後解散し、各自の調査、小旅行をした後、七月中旬から八月下旬の間に、磯野、寺本

●お知らせ ナンダ・デヴィ縦走報告会

第三三六回小集会として、ヒマラヤ登山史上初めての縦走に成功しました日印ナンダ・デヴィ登山隊の報告会を、左記の通り行ないます。多数ご参加下さい。

記

日時 九月二日(木)午後六時

場所 三十分開演
有楽町 朝日新聞社講堂
内容 登山報告
映画(題名未定) 8ミリ
上映、先着六百名。
(集會委員会、ナンダ・デヴィ委員会)

を除いた全員が帰国することになっております。
終わりにりましたが、ご後援をいただいた皆様には、いづれ詳

ジャヌー北壁登攀報告

小西政也
住吉仙也

長らく御無沙汰いたしました。ジャヌー登頂成功についてはすでに御承知と思ひます。本六月十日全員カトマンズへ帰着いたしました。成功と無事故を深く感謝いたします。遠征、登攀の概要を御報告します。

三月十五日BC (4500メートル) 設置

三月十七日登攀開始

三月二十日C1 (5050メートル) 設置

三月二十六日C2 (5500メートル) 設置

四月九日C3 (6200メートル) 設置

四月十八日C4 (6500メートル) 設置

四月二十五日C5 (7150メートル) 設置

五月九日C6 (7400メートル) 設置

五月十一日登頂(隊員三名)

五月十二日登頂(隊員三名、シエルパ二名)

五月十三日登頂(隊員三名)

細な報告を申し上げる機会もあるかと思ひますが、取りあえず、ありがとうございましたと、お礼の言葉を申し上げます。

五月十四日登頂(隊員四名、シエルパ一名)

BCは予定通りジャヌー氷河をへだて、登路北壁を真正面に仰ぎ見るモレーン上の絶好の場所。三月中旬であるにもかかわらず雪もなく、日当りのよい枯芝地です。

登攀開始とともに、直接氷河を横断して約4500メートルの岩壁に取り付き、これより以後五十六日目の登頂まで、頂上頂点へのロープフィックスが手すりのように行われました。C2からC3設置に多日数を費したのは北壁登攀中最も困難な岩壁があつたためにかつよいキャンプ・サイトもなかったからです。C5からC6設置が遅れたのは、強風で行動不能な日が多かつたせいです。C5の位置がジャヌー北壁両翼の東肩東峰の下部で、この岬のような地形のためか、強風や寒風の多い場所でした。

五月十四日、C5には二隊員、二シエルパが登頂をねらつて待機していましたが、十五日強風の

ため動けず、時期的にも今年のモンズーン襲来が予測されたため、残念ながら五月十六日撤収に踏み切りました。

今回の登攀を振り返りますと、途中高所障害の現われた隊員ももちろん多かつたのですが、五月十日ごろにねらいをつけた高所順化がうまくおこなわれたこと、天候が比較的良好かつたこと(例年と比較はむづかしく、またモンズーン来襲は明らかでなかつたが、四月中が行動不能日が多かつたようでこれはC5付近の局所的の強風と考えられます)さらに6500メートル付近までところどころ前年のポストモンズーンのニュージラランド隊の登攀跡がみられ、精神的に登高意欲をかき立ててくれたことなど幸運に恵まれたことも多あります。しかし完べきなロープ・フィックスおよびルートの整備(全期間)にみられるみごとなチームワークが最大の成功の原因と思ひます。

五月十六日二十日撤収
五月二十五日六月八日(キャラバン(BC下ダーラン))
六月十日カトマンズ帰着
カトマンズでの残務整理終了後隊としては現地解散とします。
以上簡単ながら遠征登攀の経過といたします。かきねて貴会ならびに各位に感謝する次第です。

(六月十日)

名誉会員

日高信六郎氏

を悼む

六月十八日午後一時、心臓衰弱のため逝去、享年八十三歳。明治二十六年(一九一三)四月誕生。明治四十一年(一九〇八)二月、十五歳で日本山岳会入会(会員番号一四二)、一高、東大在学時代(一九二一)一九一九守島伍郎、大木操氏らとよく登山をしたが、大正三年木暮理太郎氏を知ることになってからその影響を強く受け、武尊山、白砂山等の早期登山を行い『山岳』誌上にその紀行を発表した。大正九年九月フランス大使館勤務となって渡仏、大正十年(一九二一)七月、邦人として初めてモンブランに登頂した。外交官として海外生活が長かったため日本の山々に登る機会が少なかったが、終戦後は精力的に日本各地の山々に登り、また本会のクラブルームを訪れることも多く、昭和二十八年(一九五三)評議員並びにヒマラヤ委員会委員、昭和二十九年副会長、昭和三十三年(一九五八)と昭和三十七年(一九六二年)会長として、本会のため多大の尽力をされた。昭和四十年(一九六五)名誉会員に推された。

また自然公園審議会、国立公園協会、自然保護協会の役員として

も貢献され、晩年は日本ネパール協会長として、日ネ親善のため尽くされた。『山岳』、『会報』への寄稿も多く、著書『朝の山・残照の山』(昭和四十四年刊)にまとめられている。

遺言によって葬儀は近親者のみで行われ、故郷福岡に埋葬された。本会はこのに深甚なる哀悼の意を表する。(望月達夫)

日高さんのこと

沼倉寛二郎

このたびの日高さんの訃報は全く思いもよらなかったことである。

私たち仲間(三水会)で日高さん、石原さんを囲む集いはずいぶん前から話題になっていたが、なかなか実現しなかった。昨年、やっと一月にやることに本ぎまりになったことをご案内したところ大変なご期待と喜び方であった。しかしお二方ともあいにく風邪とご都合が悪くなり、四月十七日(丹沢の塩川鉱泉)に延期することにした。当日は万全を期すため送り迎えの専属をつけることにした。

幸い若い中川(恵)君が進んで奉仕する申出があつて万事お任せすることにする。到着が予定よりおくれているので、途中まで迎えに出る。三〇分余りおくれ、大変ご満悦の態で車から下りられた。支え手を差し出したら、沼倉君随分

ご迷惑をかけるネ、中川君がよくして下さったので心から感謝の意を表されていた。

六時すぎ、型通り集会の挨拶にあいにく病気のため欠席の石原さんのことを申上げると、ご挨拶にたれた日高さんは自分ごとのように本当に残念なことですと、こやかに感慨をふくめられ、その感謝の言葉は今も私の耳から消えない。

盃が進むに従い自然なごやかな雰囲気にとけ込み、渋い歌も出る。日高さんをはじめ一同ご満悦のつぽである。日高さんからは今宵は随分入りましたので「床」はトイレの近くにして下さいとの希望があり、専属の中川君と私が側近することにした。随分ご機嫌の割り合に変わったこともなく、朝飯も思いの外召し上り方であった。記念撮影後中津溪谷探索の組と分かれば、日高さんを二人で抱え歩いたら、これはあまりいいかつこうではないですネと一応「支える」ことをご辞退される。

小田急鈍行に乗り継ぎ新宿にいたとき、お疲れの様子もない、日高さんにお茶を勧めたらコーヒをいただきましたましようかネと喜んでどもとめられる。車中もそうであったがなかなか話題がつきない。若い中川君には日高さんのお言葉の一語も洩らさぬよう、すべてが大切なことばですからと申伝えておいた。

話が富山の国体(日高さんは大会副会長であった)にはずむ。

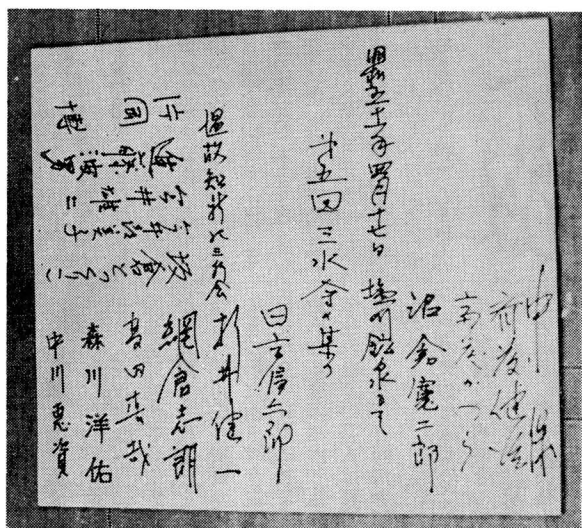
この朝、前日の晴天に引換え荒天になり、私の受持ち立山谷ルートと、山本(朋)さんの剣沢ルートを大変心配されていた様子であったこと、また幸いに私たちは豪雨

日高さんを囲んで

三水会の行事として、日頃お世話になった日高さん、石原さんを囲んで一席設けて、昔話に花を咲かせる会を持ちました。四月十七日、桜咲く中津川畔塩川鉱泉で、川魚と山菜の料理に舌鼓を打ちながら、夜の更け

を避け一時間早目に出発した適切な処置のため増水の立山谷から難を一瞬免れたことをよく覚えておられ、わがごとくのように喜ばれ、中川君に洩らされた様子を伺い、その記憶力に恐縮した。

新宿駅で休憩後私たち二人でおるのも忘れ語りあかしました。あれほどお元気だったのに、もうお逢いできなくなるとは……この会が会員たちと語りあう最後になりました。ご冥福を祈ります。(中)



宅までお伴するため山行を断つて来たのだが、日高さんは、大変遠慮される方で、中川君だけでいいですよと鄭重に辞退されたが、なぜか去りがたかった。

翌日うかがったところ常にご機嫌で途中目黒駅のレストランに昼食を誘ったところよくうけられ、三時すぎお宅までお送りしたときは大変なご満悦で挨拶された様子であった。

毎月の日ネ協会常務理事会には率先かかさずご出席になり、会の終る十一時すぎまでいつもご熱心につくされていたことが印象的である。

去る四月二十四日のヒマラヤン・エコロジーに関するシンポジウムの時もご熱心に会長の責を充分全うされ、交歓会にもお元気に出席された。

六月五、六日、八王子大学セミナーハウスにおける日ネ協会の総会、学会には珍らしく役員会を欠席、自重されたことが気がかりであった。

思うにお茶の水の東京支部時代から本部の役員会に三十年近く何かとご鄭重にご指導をうけた私たちにとって、このたびの日高さんの御昇天はあまりにも強い衝撃で限らない淋しさである。山岳協会の体協入りにより東京支部の発展的解消になったとき「何か中心が消え淋しいことです」とポツリ洩らされたことがつい昨日のよう

に思われる。お茶の水時代の三水会を再開、支部に代行して集っていることを申し上げたら大変よろこばれ、どうか山岳会のためにと激励のお言葉が印象に残り忘れがたい。今身近かな大先輩を失ったことは耐えがたい悲しみと淋しさにおおわれる。

本邦初のガイド組合

——歴史は大切にと——

「対山館が建てられたのは、明治二十三年晩秋。山国の古い商家のように見えるこの旅館は、これら岳人たちのよきベースとなったが、主人の百瀬慎太郎は北アルプスの名ガイド。日本で最初の登山案内人組合をつくったのも彼である……」

これは「サンデー毎日」四月十一日号に掲載された瓜生卓造氏の「おおまち物語」の書評の中の一節である。この本は最近「山と溪谷」に一年ほど連載された小説なので、会員の中にも読まれた人が少なくないかも知れない。対山館を中心に、あるいは舞台として展開された小説だから対山館やその主人百瀬慎太郎氏が物語の中に大きなウェイトを占めるのは当然である。

それだけに、書評のなかにある「百瀬慎太郎は北アルプスの名ガ

(七月八日記)

* 去る六月二十二日、東京麻布の国際文化会館で故日高信六郎氏追悼の会が日本ネパール協会、日本山岳会などの主催で行なわれた。当日の様様と他の追悼記は、締切りの関係で次号に収録します。

渡 辺 公 平

イド」という誤りは訂正しておかねばならないと思う。評者は「秋谷豊」とあるから、恐らく「登攀」という山の詩集なども出版したことのある山の好きな詩人秋谷豊氏であろう。

作者もそんなことを小説の中に書いてはいないのだから、これは評者の思いがけいだろうと思うのだが、百瀬氏がガイドであったという誤謬は登山史の上からも無視できないのではっきり訂正しておきたい。

評者も書いている通り、百瀬さんが、わが国ではじめての登山案内人組合をつくった人であることは今更説明するまでもない。

百瀬さんが、独力で大町登山案内者組合を結成したのは大正六年六月のことだ。明治四十二年の八月、彼は十八歳の若さで日本山岳会の会員となり、大正初・中期に

かけて登山活動を続けながら、家業である対山館の主人として、全国から大町を訪れてくる登山家たちのために、案内人や人夫のあっせんやコースの相談など真剣になつて世話をしつゝ。

そして針ノ木越え立山・剣や、高瀬入り槍・穂高、あるいは後立山方面を目指す登山者がふえ、案内人や強力が必要が大きくなるにつれ、彼は案内人の本格的な養成の必要を考へるようになった。

大西又吉、伝刀林蔵、勝野玉作、黒岩直吉などをはじめ登山者の要望に応える人物がそのころまで大



町とその周辺にいなかったわけではない。大正の初期には登山案内人という職業的な名称が生まれたと百瀬さんも書いている。そして登山口としての大町の将来を考えまた登山者の期待に応えるためには登山案内人の組合を組織しなくてはと決意を固めるようになったのである。

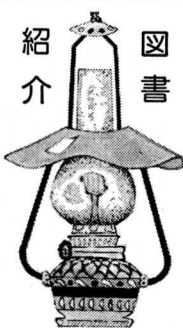
大正六年(一九一七)に発行された「山岳」第十二号第一号には組合設立の記事が出ているが、それには次のように書かれている。「信州大町が近來登山の中心点

となり、案内者の需要頗る多く、ために此れが配給の当路たる大町対山館百瀬慎太郎氏は、大に見る所ありて、登山案内者組合を設立せり。氏は本会々員にして、年々同地を通過する登山者の為め少なからぬ厚意と便宜とを与えられつゝあり。同氏の主張の元に左記の如き規約に由りて今夏より其設立を見た。日本に於て唯一にして最初なる登山案内者組合は、斯くて生れたり。吾人は百瀬氏の此舉を満腔の喜びと同情を以て迎ふるものなり。」

その規約なるものは十八条から成っており、当時としてはよく整備されたものだが、組合が大町を出発点として各方面登山の案内者及び強力を以て組織されること、その目的が善良にして敏捷なる理想的案内者の養成であること、組合員は登山者の案内、荷物の負担を為し、登山者の為に一切の労務を行なうなどの諸項を紹介するだけに止めておこう。

それよりも、まだ大町全体に登山口というような意識が薄く、町から見える山の名を登山者に聞かれても、あれはアルプス山ですというようなのん気な返事をする人が多かった時代であったこと、したがって案内人組合を設立したら大町警察署長から「誰の許可を得て徒党を組んだのだ」などとお目玉を頂戴したという百瀬さんの述べの方が興味深い。

図書



紹介

THE HILL MAGARS AND THEIR NEIGHBOURS

川喜田二郎著

一九六三～一九六四年の日本民族学協会主催、著者らによるネパールのポカラの西方地域の長期調査を中核とし、その十年ばかり前に出かけた日本山岳会主催のマナ

大正六年といえは百瀬さんはまだ若冠二十六歳、その青年がとにかく日本最初のガイド組合を独力で設立したのである。日本山岳会の先輩諸氏が「吾国唯一の登山案内者組合」として其発達に期待する所多し。吾人は同志諸君の同情と助長を同組合の爲め望む「山岳」第十三号(第一号)と力こぶを入れているのも肯ける。

対山館主人、百瀬慎太郎氏は多くの秀でた登山案内者を発掘し、養成したが彼自身がガイドであったことはなかった。むしろガイドの生みの親というべきであらう。

スル隊に学徒班として参加して得た知見、さらに一九五八年の西北ネパール学術探検隊(著者既刊鳥葬の国)に詳しい)におけるおびただしいフィールドワークの資料等の集大成ともいふべきものが本書である。いわば著者によるネパール研究の決定版と言ってもさしつかえないであらう。

著者は一九六三年アンナプルナ山群とダウラギリ山群との間を流れるカリガンダキ上流、とくにアンナプルナサウスの南麓地域のシールカ谷を中心とするマガール、グルン、タカリ、タマン等の少数民族に民族に関する民族地理学上の研究的調査をひろい分野にわたって行っている。

そして、これらの山地民族と諸カーストの関連、この地域にみら

中年以上の登山者には、こんなわかりきったことを説明する必要は全然ないが、対山館の名前さえ知らない若い世代の人たちのために敢えて一文を草した。

ついでだが、大沢小屋を建設したのは、案内者組合の設立に遅れること八年、大正十四年。さらに四年後の昭和四年七月、針ノ木峠の小屋が建てられた。

改めて百瀬さんの残した足跡の大きさに敬意を表せざるを得ない。

(五一・六・五)

れるもつともユニークな亜熱帯から氷雪地域までの自然と文化構造の垂直分布、家畜化されたヤク等の利用によるアニマル・ハズバンドライイの実態、コロイ内のコミユニティ、住民の信仰と土着宗教、シコビエ栽培に糸口を求めながら稲作の起源についての探究を展開していく等稀なる調査データを素材のまま提供しているとともにこれらを駆使した詳細な解剖が行われている。今日ネパールに関する研究者や類書の多いなかに、なおかつこの労作は著者川喜田二郎氏独壇上のものであってよいのではあるまいか。

シールカ谷やウレリ村のマガール族に、日本の神道にも似たブーメという信仰のあることを三十頁にわたって記述されているが、これはおそらく本書による報告が学界においても最初であらうと著者は述べている。

この調査のため長期間滞在したシールカ村の住民を説得して、著者は無動力揚水の施設を提案し、また薪木運搬のための軽架線等の技術協力を実施したことは既に知られているところである。私もかつてシールカ村へ行ったことがあるが、そこでは急傾斜地を流れのところでまで降りて必要最小限度の水を壺に汲み上りの方まで運びあげるのが女子供達の労役であったのを見ていた。いま村人はビニールパイプの先端からこんこんと溢れ

出る用水の恩恵に浴しながら炊事はもとより、洗面、洗濯等の利便をも限りなく享受しているにちがいない。このような発想と成果もすべてこの調査を実施したときの住民とのコミュニケーションを通じて生れてきたものであらう。

本書はネパールの中部および西北地域の調査がその素材となっており、これはさきにもふれたとおりであるが、同じ著者によつてさらに東部ネパール地域の民族地理学的調査が行われることを期待してやまない。

本書の著者小方全弘氏は、一九六八年以来ブータンへの旅を重ね先に「ブータン素描」(芙蓉書房・六九年)と「ブータン感傷旅行」(茗溪堂・七二年)を公けにした。本書「続ブータン感傷旅行」は、小方氏の第三冊目のブータンに関する本になる。内容は、主として七二年にブータンが国連に加盟した祝賀記念式典にまねかれた折と、さらに七四年に新国王の戴冠式に列席した際の紀行だが、それ

続ブータン

感傷旅行

小方全弘著

一九七四年東海大学刊、B5判四八四頁、写真、図版多数、全巻英文、価格一万三千円(織内信彦)

以前の最初にブータンに入国した時からの想い出などが各所にはさみこまれている。読後、まず感じるのは、まことにほほえましい著者とブータンの人びとの親密な交流である。文章にもよく表われているが、著者の人好きのする人柄があつてこそ、こうした交友関係が生まれたのであらう。VIP待遇でヒマラヤの王国を旅できる著者の境遇は羨しいの一語につきる。前著「ブータン感傷旅行」の紹介は島田巽さんがされたが、「山」(三三三号)、そのなかで書名を「友情旅行」としたほうがさらに適切でなかったかという意味のことを述べられている。「続」となつたいまさら、どうしようもなからうが、ますます「友情旅行」のほうがびびりたりしうだ。著者のブータンに対しての愛情と知識をすべりもりこんだともいえる本である。

記述は、一応紀行文の形式をとっているが、単にそればかりでなく、ブータンの風物を広く紹介しようとして著者は努めているようだ。そのためでもあるが、前回、あるいは前々回の旅での見聞などが挿入されて、それがともすると話を前後させている。文章の流れを中断させ、読者を混乱させないでもない。途中、ブータンの民族衣裳についての活字のポイントをおとした記述もあるが、一冊の本としての流れから見ると、あまりす

つきりしたものとはいえない。執筆と編集の両面において、もう少し構成に配慮があってもよかったのではなからうか。巻末の注、参考文献は当然目次に載せる項目であろう。

B6判二五二ページ、口絵は津村重舎氏の色彩画一枚とカラー写真八ページ。見返しに地図がある。一九七六年四月発行、若溪堂、一五〇〇円。(横山厚夫)

東ネパール 登山と調査 報告書

——マカルーII
峰を中心として——

沼田 真・編

一九七一年に千葉大学ヒマラヤ委員会が派遣した、千葉大学東ネパール学術調査登山隊の公式報告書である。型式は横書の学会誌の形をとり、英文の要約がついている。英文のタイトルは *Mountaineering of Mt. Makalu II and Scientific Studies in Eastern Nepal, 1971*, Edited by Prof. Dr. M. Numata, Himalayan Committee of Chiba Univ. (1975) となっている。

千葉大学は一九六三年にロールワリン・ヒマールに学術調査隊を派遣し、ヌンブル峰の登頂とすぐれた学術調査の成果をあげている。その報告書『東ネパール——生態調査とヌンブルの登頂』に

ついている「山」二四〇号12頁に紹介されているので参照願いたい。本報告書は前回の報告書の続編のような形をとっている。

千葉大学の山岳会では、ヌンブルに続く計画としてロールワリン・ヒマールやチョーバ・ヒマールを計画していたが、一九六五年のネパール政府の登山禁止令により、止むなく一九六六年にはアフガニスタンのミール・サミール峰へでかけたが、登山禁止令が解けた一九七一年に再び東ネパールのマカルーII峰へ末路の西稜ルートから挑むことになった。

本報告書は、第一部にそのマカルー峰の登山報告、第二部学術調査報告、第三部遠征資料、第四部高木邦夫君追悼からなっている。

マカルーII峰の登山は未踏の西稜からの登頂を目指し、綿密な登山計画にもとづき、九月中は順調にキャンプをすすめたが、九月三十日～十月二日にかけて、この時期としては七十七年ぶりとかの大雪に襲われ、雪が止んだ後も五日間もルート整備に時間をとられ、その上、西稜のルート工作が思うようにのびなかったため、十月十日止むなく西稜ルートを断念し、マカルー・コル経由のルートに変更した。こうして十月十五日には高木隊員とシェルパのテンディがマカルー・コル直下七二六〇mまで達したが、高度と寒気と疲労のためC4に引返した。その翌日の

十六日から天候が再び悪化しC4が雪崩の危険にさらされたためC3へ退却を開始したが、その途中より高木隊員の容体がおかしくなり、二十日には漸くC2まで収容したが、遂にその夜不帰の客となった。

登山はこれをもって打ち切り、以後遺体の収容作業で終っている。この高所障害による遭難事故

辻村さんの「スウィス日記」

(梓書房版)の冒頭に添えられた武田さんの「追憶」は二一ページに及ぶかなり長いものだが、その二〇ページのなかほどに、

武田さんが辻村さんの高山植物園で写した写真を、辻村さんがうけとり、その返事を武田さんが手にしたのが、八月二十九日(大正十二年)の晩であったという記述がある。

過日武田家から寄贈された古い手紙のなかに、その辻村さんの手紙を見出した。八月二十七日朝と認められたその一通こそおそらく辻村さんの最後の手紙なのではなからうか。九月一日辻村さん一家は再び還らぬ人になったことは、改めて書くまでもないからだ。次に掲げる一通がそれである。

大変御無沙汰いたしました、御変りありませんか。

についての考察は、小浜、吉永両隊員により詳細に行われ、謙虚に反省されているが、これを読んてつくづくヒマラヤ登山においては生と死が紙一重であることを感ずる次第である。今回の事故も不運な条件が重なって死亡にまで到っているが、私自身同様な体験をしなから、優秀な医師、豊富な酸素迅速な下部キャンプへの収容等……

本日書物確かに拝受御患与の写真及び上包みの山岳大会の通知もありがたく頂戴いたしました。

僕は春先きの病気にたたられて此の夏は殊の外暑気になやまされ毎日々々苦しみ通し、この頃冷風がたつたのでやっと工合がよくなりました。比叡山に七

辻村さんの書簡

月月末に行き咽喉を痛めたのと、日盛りの京都郊外で九十六度の暑気にやられてすっかり閉口して、帰宅すると発熱、どうも飛んだ目に逢ひつく／＼日本の夏がなさけなくなりました。今年、の登山はいかがでした、いづれ九月は御目にかかってゆ

とよい条件に恵まれて九死に一生を得ているだけに、特にこの点が強く感ぜられるのである。

この遭難の事例は、死者には申し訳ないが、典型的な高所障害の事例であり、考察と反省も核心をとらえている。今後ヒマラヤ登山に出かける者にとっては貴重な教材といえる。この意味でも、本書は一読に値するものと思われる。

つきり御話を承れる事と楽しみにしてゐます。

夏のうちに書くつもり山の原稿も扁桃腺がはれて発熱するので筆をとる気も起らず、煩悶してゐるうちにもう秋になってしまふ、山登りも今年は準備して置ながら聞きわになつて放棄する有り様、どうもむしゃくしゃして仕様がな。

八月二十七日朝

久吉 兄

湯本 伊助

玉机下

なお辻村さんの手紙は Villa alpina/Hakone-Yunoko と右上隅にブルーで印刷された薄手の原稿用紙二枚に認められたものだが、辻村さん専用で作られた用紙で、芸術的趣味の豊かであった故人の一面がうかがわれる。

(一九七六・五・九 望月達夫)

第二部の学術調査は、千葉大理
学部の得意とするエコロジカルな
面からのとらえ方をしている。
特に専門家である大沢雅彦、P・
R・サキヤ、沼田真氏らによる「東
ネパール・アルン谷の森林植生に
ついて」は、価値ある論文である
し、鈴木一元氏の「東ネパールの
住居」の論文も優れている。



カット/松本慎太郎

学術論文の最後には、編集者の
沼田教授による「ネパールの風土
と位置」がある。これは全体のま
とめにふさわしく、ネパールにお
ける生態学を中心とした各国の研
究活動がのべられ、日本の学術調
査も個々にはすぐれたものが多い
が、もう少し組織的に総合調査を
行う必要のあることを述べられて
いるが、この点は、これからのネ
パール研究の方向と理想といえ
う。

B5判、四一七ページ、写真、
図版多数、一九七五年三月千葉
大学ヒマラヤ委員会発行、非売
品なるも左記へ申込めば入手で
きる。

〒244横浜市戸塚区和泉町一九五
一、小浜浩三宛 (松田雄一)

アラスカの山からゴミの回収を要求

先日、アメリカ山岳会より、別項のような手紙
が送られてきました。これによると、最近アラス
カの山、特にマッキンレーでのゴミによる公害は
目にあまるものがあり、特にそのゴミの大半は日
本からのものとのこと。各登山者が持込んだ空罐
その他は必ずもち帰ることにより、山の自然をゴ
ミから守るよう、日本の登山者の協力をよびかけ

ています。

単にアラスカの山だけでなく、日本を含む世界
中の山からゴミをなくすため、自分が山に持込ん
だものを必ず回収し、持ち帰るよう、登山者各位
の徹底した協力を望みます。

(海外連絡委員会・秋田しおみ)

June 3, 1976

President
Alpine Club of Japan
Sakura Building
6-1 Yushima, 1-Chome
Bunkyo-ku
Tokyo 113, Japan

Dear Sir:

For several years the American Alpine Club has
been working with the National Park Service in an effort
to eliminate the litter left by climbers from all over
the world on Mount McKinley. There are over 50 expeditions
there each year, and many more on other Alaskan Peaks.
In recent years, over a third of these have been from your
country.

Each year the Park Service and volunteers remove
large quantities of this litter. In 1974 it was over two
tons. But, despite the fact that park regulations on this
subject have been translated into Japanese, the greatest
bulk of the litter removed has been of Japanese origin.

We appreciate that misuse of the mountain environ-
ment is done by people from all nations, yet we find it
difficult to understand how a party can be strong enough
to carry materials and containers into the mountains, full;
and yet be too weak to carry them out, empty.

We appeal to you, to assist us in keeping the moun-
tains of our country free of unsightly litter, that detracts
so much from everyone's pleasure. May we ask that you bring
this concern to the attention of alpinists from your country,
who are, I am sure, anxious to be of help in this matter,
but perhaps may have not thought about the cumulative effect
that is now apparent.

Very sincerely yours,

William L. Putnam
President



WLP/jk

ヒラリーの

自叙伝

Nothing Venture,
Nothing Win by
Edmund Hillary,
Hodder and Sto-
ughton, London,
1975

昨年刊行されたこの自伝はすで
に何版かを重ねているので、かな
り広く読まれているにちがいがな
い。邦訳の仕事も吉沢一郎さんの
手で進められていると聞いている
から、わが読書界でも話題の一つ
になることだろう。

ヒラリーには処女出版の High-
Adventure (邦訳「わがエヴェレ
スト」) をはじめとして、共著ま
でふくめると数冊の著作があり、
邦訳されているものも少なく
ない。だから、今度の自叙伝のな
かには、すでに他の前著のなかで語

られていることも、かなりあるの
は止むを得ない。だが、それら個
人の業績を一貫して、この偉大な
登山家、探検家が、どのような環
境のなかで成長し、どのような鍛
練を経て完成していったかを、年
代を追いつながら知ることの意義は

大きい。またエヴェレストをはじめ今までの遠征などに付随する裏話やエピソードなどにも、新たに語られているものが少なくない点は、読者にとってありがたい。

登山や探検そのものの記述のほかに、この自伝の相当部分が、これらの仕事の後始末について当てられている。自分たちの遠征などを成功させ、実現させてくれた社会の各方面に対して、いかに酬いるべきかをヒラリは真剣に考える。シェルパの村への学校、病院の寄進も一つの謝恩の現われであったし、それらの建設資金を拠出

六十二年ぶりの上高地の夜

——第三十回ウエストン祭に参加して——

大 木 操

私は昨年六月二十一日の朝日新聞夕刊を見て、ハッと驚きもう一度読み返した。そこには、その昔ウエストン氏山登りの案内役を勤めた、上高地の主上条嘉門次老のひ孫に当る上条輝夫さんが、英京ロンドンテムズ川の南パトニー

ール墓地で、故ウエストン夫妻のお墓に花を供え、親しくお詣りをして、写真と記事が載っていたからである。

日本の山々に最後の別れを告げて去っていった。恰度その二年前の大正二年八月初旬のこと、私は未だ二十一才の学生で日本山岳会に入会したばかりだったが、この上高地で元氣なウエストン夫妻（この時ウ氏五十二才）と嘉門次老（この時六十八才）に出会ったという奇しき因縁を持っているだけに、この記事をみてまことに他人事とは思われない感銘をうけた。そればかりか、嘉門次老の血が繋がっているひ孫の輝夫さんが居ることも初めて知り、今は嘉門次小屋の主になっていると聞くに

及んで、山岳界のことに疎い私を更に驚かせたのである。こういうわけで、私は心ひそかに健康さえ許せば、次のウエストン祭の折にでも上高地へ出かけ、昔の河童橋の上でウ氏夫妻と一緒に撮ったひいお爺さんの写真を、輝夫さんに手渡したいものだと思願するようになった。ところが、年は明けたが不覚にも流感にやられての寝正月、死の影さえチラつく始末となった。今秋には満八十五才になる老骨であることを思えば安閑としてはいられない。いっそ凡てを日本山岳会にお委せした方がよいと心に決め、病癒えてから復活入会の上、ウエストン夫妻らを含む数多くの山岳写真ガラス原板と共に、その引伸し写真額二面を添えて寄贈をすませ一安心した。あとはただひたすらに体調を整えることに専念した。

幸いに健康は回復した。心を弾ませて第三十回ウエストン祭に参加するため、六月五日長女の宮前淑子を伴って雨の松本駅に降り立った。偶々同車した織内副会長のお蔭で、万事都合に懐しの上高地に着き、先ず以て日本山岳会の上高地山岳研究所でひと休みした。ふと気がつくところ、板壁に、先に贈呈したウエストン夫妻らの写真額が掛かっているではないか。何よりも私は嬉しかった。居合せた会員の方々と、山菜の漬物で茶を飲みながら山の話を交わ

した後、雨も上がったので今夜の旅の宿西糸屋へ落ちついた。その夜は大広間で開かれた信濃支部の晩餐会に仲間入りして皆さんと歓談した。初めて上条輝夫さんとも顔を合せて、ひいお爺さんの佛を想い、また英京での墓参模様を聞いてウ氏夫妻を偲んだ。宴果てて室に戻ると、眼の前の梓川も六百山もすっかり闇に包まれていた。正にこの夜こそ、私にとっては六十二年ぶりに迎えた上高地の夜であった。（十年程前に来たがそれは日帰りのバス旅行だった）ここで想い出すことは六十三年前といえば、上高地の宿屋は

してくれた方面にも労をいとわず講演旅行などをつづけているのも著者のサービス精神からである。そのような、社会的責任を自覚する姿勢には敬服するほかはない。また、本書では、従来の成果を顧みて「死んでも悔いなし」といいたが、まだまだやりたいアドヴェンチュアは限りなくあると、著者はその夢を抱き、そのいくつかを描いてみせる。本書の題名どおり、著者の不屈の探検精神が全巻にあふれていることを、読後あらためて痛感させられるような自伝である。

（島田巽）

売場ご案内

最新入荷の本

- ★山の文芸誌ペレク第12号300円
- ★ヒマラヤをめざした越中人たち（橋本 広）1,600円
- ★越後の山旅・上巻（藤島 玄）1,500円
- ★会津の峠・上下（会津史学会）各1,300円
- ★森林・草原・水河第二版（加藤泰安）2,500円
- ★遠い山 近い山第二版（望月達夫）1,500円

特製本在庫ご案内

- ★坂本直行画文集 雪原の足あとと原画花の絵（淡彩2号）付 25,000円
- ★南会津山の会編 いろりばた 8,500円
（上記限定本の在庫があります。お求めは直接茗溪堂お茶の水店へ）

茗溪堂

＜山の本の売場＞お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

してきた。亡き人を偲んで集った山の愛好者数百人、先ずウエストーン碑への献花、高山委員長の挨拶で式は始まった。織内副会長はじめ各方面の代表者の祝辞があった後、碑の製作者佐藤久一朗氏の話に移った頃から、恒例とばかり激しい山雨のお見舞を頂戴した。

次でマイクの前に立った私は、手短かに六十三年前の学生時代河童橋の上でウエストーン夫妻に出会った様子を物語り、その時撮った写真がこれであると例の写真額を持ち出して、周囲を取り巻く皆さん方にご披露した。若々しいウエストーン夫妻の生前の姿を眼のあたり見て、俄然参加者は興味を惹かれたのであろう、歓声を挙げてドツとばかり押し寄せ、写真額に対してカメラの一斉射撃をうけた。

その上私まで質問の追い討ちに会うという始末で、雨中の広場は少し混乱気味になってしまった。だが、このクライマックスが大詰の場面となって、第三十回ウエストーン祭は芽出度く幕を閉じたのであった。生き証人の私がウエストーン氏を偲ぶ祭に、少しでも役に立つたとすれば、本望これに過ぎないものである。

祭典の後西糸屋で開かれたウエストーン祭関係の中食会の席上で、私は先刻会場で披露した写真額を上条輝夫さんに記念贈呈することが出来て、これで念願も叶い心も晴れ晴れとした。

同時に上高地一帯の空もこの頃から晴れ上がり、快適な初夏の陽射しが一杯に広がってきた。私は輝夫さんの案内で明神池の嘉門次小屋を訪れた。昔ながらの神秘的な明神池の静寂な水面、嘉門次老が昔風呂がわりに浴びたという小屋わきの清冽な流れ、見るもの聞くものの凡てが、永かったプランクを呼び戻す追憶の種でないものはなく、文字通り夢見る心地で立ち尽した。

更にここから織内氏旧知の徳沢園主上条進氏に導かれて、奥上高地徳沢の水壁の宿まで車を進めた。昔牧場だった緑地の爽やかさが一入眼に沁みだが、それよりも澄み切った青空にくっきりと、猛獣の牙のように前穂高につづく北尾根の鋭角的な姿が、浮彫りにされているのを仰ぎ見たとき、思わず老の身にも血が躍るのを抑え切れなかった。いつ見ても山は険しいほど美しいものだ。

徳沢園の澄んだ空気が肌寒くなった。スウェーターの上に上衣を重ねて、暖い珈琲のご馳走になりながら、井上靖氏の小説「氷壁」とのゆかりある話を聴いた。すっかり山の気分を満喫しもっと落ちついて居たかったが、美しい夕映えが薄らぎ始めたので、梓川の右岸を一気に降って宿に戻った。

上高地三日目の朝は、それこそ一点の曇もない好天気恵まれた。早速娘と共に飛び出して、素

晴らしい景観に見とれながら朝の散歩を楽しんだ。残雪豊かに化粧した穂高連峰が、美しい山肌を借し気もなく斜め出している。お早ようとウインクしている。赤茶色に輝やく焼岳は、朝の服とばかり白い煙を吹かしながら、いいお天気ですねと会釈している。そのむかしそれぞれの頂上を極めた古い恋人であるから、ややお久しぶりとレンズを向けて挨拶を返した。

河童橋の広場を通りすがりの赤いヤッケを着た二人の若い女性がつと白髪頭の私のそばへ寄ってきて、「昨日はご苦労さんでした、面白い話を聴きました」と不意に声をかけられて、私は一時ボカんとした。そして、今度来てよかったなど、つくづく思いながら上高地を後にした。

東海支部一九七六年度 総会報告

四月二十七日夜七時より愛知県青年会館で本年度総会が行なわれた。出席者は樋口支部長以下二十一名。伊藤の議長で前年度事業報告、収支決算報告、今年度事業案予算案、役員案が順次検討され、承認決定された。

今年度の支部予算案は、支部費として徴収した分を支部報、支部員名簿作成の経費とし、本部からの還元金で事務運営を行なおうという方針。事業案は松井氏から月

例会(十六ミリ映画の上映など)と山岳懇談会(東西有名人の講演)の提案があり、湯浅氏からは支部の旧役員に対する処遇の検討が提案され、名誉支部員、顧問、支部友などを含めて委員会で取り上げることになった。

支部活動に新しい支部員の参加が目だつ最近の情勢を反映して、支部運営法についても活発な意見が交わされ、有意義な議論がなされた総会であった。(伊藤行人)

本年度東海支部役員 支部長 樋口敬二 副支部長 原真 常務委員 池沼慧、伊藤行人、尾上昇、鶴田倍弘、中世古隆司、松井宝一、委員 阿部俊郎、池上宏一、沖允人、岡田良平、小川繁、小栗嘉浩、藤森元夫、堀田誠三、湯浅道男、会計監事 郡正也

総会出席者氏名 小川繁、蟹江武士、中世古隆司、湯浅道男、永井勝美、川北仁、山田勇、岡田良平、鶴田倍弘、原真、熊沢正夫、沖允人、原正昭、樋口敬二、大口瑛司、小栗嘉浩、池沼慧、松井宝一、木村孝保、堀田誠三、伊藤行人

「この一本展」のお願い

年次晩餐会にあわせて行なっております恒例の「この一本展」は昨年お休み致しましたが、十五回目になります今年には装いを新たに書物だけにどまらず、書翰、写真、絵画なども含め次の要領で催したいと思ひます。ご協力お願いします。

申しあげます。なお、展示品の客観的価値を重んずる意味から、選考は図書委員会に一任願ひます。

一、山に関する蔵書の中から珍本秘本、稀本、署名本を持ち寄る。

一、山に関する珍らしい写真並びに絵画を「この一本」と思われるものを持ち寄る。

一、「この一本展」は年次晩餐会当日会場に持参いただき展示、会後持ち帰る。

一、持参品の「この一本」について簡単な随筆(四〇〇字原稿用紙二枚以内)を添える。

一、原稿には「この一本」の書物については書名、著者名、発行所名、発行年月日を、写真・絵画については場所、製作者、製作年月日を記して下さい。

一、原稿の締切りは十一月一日、宛先は日本山岳会図書委員会。

一、出品目録および原稿は印刷して晩餐会の当日参加者に配布する予定です。

今年の晩餐会をより有意義にするために皆様のご協力をお待ちします。(図書委員会)

昭和五十一年八月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事(株)くらビル

発行所 法団 日本山岳会

発行者 今西 錦司

編集代表 大森 久雄

(813)二八六代表

東京都港区赤坂一丁目三番六号

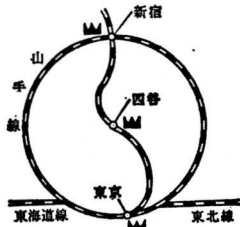
振替口座東京三三三九二九番

印刷所 株式会社 技報堂

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区豊島崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の本

森林・草原・氷河

第二版

加藤泰安「へA五判四八二頁」定価二、五〇〇円
未知の領域が既知となると、さらにその先に
未知をひろげる。大興安嶺、蒙古、ヒマラヤ、
ニューギニア高地。更に捲くことなく内奥ア
ジアを夢見ている近代登山家の、四十年近く
にわたる探検と登山の記録的な叙述である。

山に忘れたパイプ

第二版

藤島敏男「へA五判五八〇頁」定価三、二〇〇円
著者のよき時代の静かだった山旅から、現在
までの山登りの紀行を中心に、随想、書評、
書信などを収録。とくに著者自ら纏めた登山
譜には半世紀をゆうに越える個性的な山の歴
史が克明に記録されている類稀なものである。

遠い山 近い山

第二版

望月達夫「へB六判三〇四頁」定価一、五〇〇円
著者は、俗受けしない、人向けのすくない、
ひっそりとした山や峠の遍歴が、いかに楽し
いかを、かざり気のすくない文を通じて炉辺
閑話のような気易さで、山仲間と淡々と語っ
ている。耳をかたむけて聴こうではないか！

山・人・本

島田 巽「へA五判三七四頁」定価二、四〇〇円
山がとりもつ種々の書物とのめぐり合い。そ
の本を通しての心暖まる人との交わり。書名
になった「山・人・本」は今回新しく書き下
したもので、ながい年月、本に親しんできた
著者ならではの興味深いものである。

山は満員

渡辺公平「へA五判三六〇頁」定価二、二〇〇円
これは楽しい山歩きの紀行集であるが、著者
のキャリアのある眼は随所に豊かな自然との
ふれあいを見出しているし、また親しみのあ
る文章で登山史上のエピソードを語り、自然
破壊に対しては鋭い批判を投げかけている。

●出版目録送呈

●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ！

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京8-24723

集会報告

第14回
木暮翁碑前懇親会
報告



有井館旧館ランプの下で
撮影／山本稔

毎年五月の第三土曜日は、甲州金山の、木暮理太郎翁のレリーフの前に集う日である。

昭和三十八年に始まり、今日に至っているわけだが、昨年から山梨支部で手を引いたので、霧の旅会を中心に、地元有志によって今年も開催の運びとなった。

五月十五日、甲府から黒平をへて、車三台で、山梨を採りながら十五時、金山に到着した。もう東京組は、木暮先生のお嬢さまの美枝子さんを始め、おなつかしい方が私たちを待っておられた。

昨年同様、堀口丈夫名コック長の指揮の下、石垣政雄、山本稔、三井茂子の地元の会員、お客さんの、岡部みち子、小松崎幸子、和子諸姉、鶴城山岳会の山岸靖彦、山梨大学のW・Vの三君など、一斉に行動開始、手ぎわよく料理はつくられていった。

十七時から一同、碑前に集い、山崎金次郎さん、野口末延さん、一柳峰幸さん、木暮美枝子さん、

近藤信行さん、山崎安治さんらの記念談話がいった。

そのあと、木暮美枝子さんをまじえて、異説のある、木暮先生の生誕年月日について、種々論議したところ、結論を得るに至らなかった。明治六年は、従来の太陰暦から太陽暦に移した年だったので、それらのからみから、二つの説がおこったような気がする。この紙面をお借りして、是非とも、明解な考証をお願いする次第である。

さて、レリーフの台座も十五年の歳月をへて、目地がひびわれて苦にしていた所、前もって、望月雅郎さん御夫妻と、有井館の当主学志さんによって、見事修復されていた。専門家の松本熊次郎さんをして、友人はだしとのおほめの言葉をいただく程の出来ばえであった。

ひきつづき、恒例の懇親会は、有井館旧館のランプの下ではじまった。今年の参加記念品は、丹波

の面取りぐいのみであり、酒は甲斐駒の麓の銘酒「七賢」。メニューは次の通りであった。

やまぶきの煮つけ、きょうりぶき、わさびのかす漬け、たらこのめくろみ、うどぶき、いらくき、こごみなどのすのもの、マヨネーズ和え、アスパラガス、やまいも、たらこのめ、わらびなどのてんぷら、みょうがだけ、しいも、沢わさび、山うどは、味噌とそえられ、こんにゃくのさしみ、馬肉のさしみ(おろしわさびそえ)、木の芽のつくだに(成沢正通氏の差し入れ)、甲州名物煮貝(三井文恵氏の差し入れ)など。最後は、有井館自慢の手打ちそばでお開きとなった。

翌朝は、金峯山、瑞牆山、身延山、下部温泉、本谷川の散策などそれぞれ再会を約し、流れ解散となった。

追記一、夜の話し合いで、この五月の金山の集りを、木暮理太郎翁碑前懇親会と称し、十月の木暮祭との名称上の混乱をふせぐ、こととした。

追記二、この集りのため、本会、斎藤健治氏、田中義元氏より多額の御芳志をいただいたことを記し感謝の意を表す次第である。

参加者(順不同)
山崎金次郎、松本熊次郎、原田幹一、鶴岡元之助、神奈川甚吉、堀口丈夫、神谷量平、神谷澄子、三井茂子、山岸靖彦、川北仁、木村

三水会

六月集会

富久子、名児耶達男、野口末延、石垣政雄、斎藤敏男、斎藤健治、高遠宏、山崎安治、近藤信行、高田真哉、網倉志朗、江崎真鈴、田中義元、木暮美枝子、山本稔、一柳峰幸、遠藤靖彦、田村英也、小松崎幸子、小松崎和子、伊藤信夫、岡部みち子、千野伸一、赤坂趣明、小林三千雄、山村正光
計三十八名

六月十六日午後六時からルームで片岡博氏を囲んで山菜のお話を伺った。永年にわたる蘊蓄を傾けてのお話は豊富で、判別の仕方、お料理の方法、各地の方言などをくわしく紹介されて非常に参考になった。そのあと氏がご持参の山菜料理、ミヅナのたたきやおひたし、ウルのすみそあえ、シオデのおひたし、根曲竹の子のてんぷらなどのほか、マタタビ、ナナカマド、ウワミヅザクラなどの果実酒を味わって一同ごきげんであった。

出席者

講師 片岡博
渡辺(公)、沼倉、堀内(章)、高田、網倉、中川(恵)、錦織、今井(喜)、坂倉、伊藤(信)、渡辺(正)、折井、進藤、近藤(信)、武田、成瀬、斎藤(桂)

会務報告

6月理事会

(6月4日午後6時 本会ルーム)

▽出席者 織内、望月各副会長、浜野、高遠、近藤、小倉、山本良、神崎、大森、皆川、大倉、黒石、橋本各理事、太田監事、小原、佐藤、浜野、折井各評議員、委任 今西会長、山本健、原、浅田各理事、飯野監事、宮下評議員

▽議案

・日本山岳会学生部ガールズ登山隊推薦状交付願いについて (大倉) 承認
・日山協名誉指導員(福井正吉氏)推薦について (浜野) 了承
・吉沢一郎氏の本会会報等よりの文章転載願いについて (望月) 了承

▽報告事項

・集会 (神崎)
年間計画決定、会報に発表
・山研 (小倉)
宿泊利用料金を5月22日より改訂 非会員一泊二、三〇〇円
・図書 (山本良)
年間計画を会報に発表、絵画展を2月頃開催予定
・自然保護 (山本良)
7月10日・11日上高地山研で集会

・青年懇談会 (橋本)

8月8日、15日 洞沢合宿

ルーム日誌

(51・6)

1日(火) 図書委員会(絵画展打
合わせ)

2日(水) 会報委員会

4日(金) 理事会

7日(月) 集会委員会

8日(火) 自然保護委員会

14日(月) 集会委員会

16日(水) 図書委員会 三水会

17日(木) ナンダ・デヴィ委員会

18日(金) 自然保護委員会

21日(月) 集会委員会

22日(火) 書評委員会、青年懇談
会

23日(水) 学生部講習会(トレ
ニングについて)

30日(水) 学生部(女子部結成)

財務委員会

今月の来室者五〇五名

会員異動 (51・6)

支部変更

六五四五 河西俊郎 その他

五八六七 松下肇 北海道

物故者

五九三六 阿岸充穂(51・6・4)

三三八二 府川裕(51・6・22)

一四二 日高信六郎(51・6・18)

除籍取消

四〇九五 重村伝平

四三七一 熊谷とも子